〔東京家政大学研究紀要　第43集 (1), 2003, pp. 13～18〕

ゾロアスター教の三位一体論

大多和　明彦

(平成14年10月3日受理)

Trinität in der Lehre Zarathaustras

OHTAWA, Akihiko

(Received on October 3, 2002)

キーワード：ゾロアスター，三位一体
Key words：Zarathustra, Trinität

【Big Bang 以前】

現代の科学が教えるところでは，我々が住むこの宇宙は130億年前のBig Bangから始まった．以来，宇宙は膨張し続けているという．しかし科学は，①Big Bang以前は何があったのか，②なぜBig Bangが生じたのかということについては，黙して語らない．

しかるに最古の啓示宗教，ゾロアスター教の神学は，Big Bang以前には「智慧ある主（マズダ　アフラ）」のみがあったのだと言う．と言っても「智慧ある主（マズダ　アフラ）」は，我々が通常経験している連続的な「長い自立的な時間（ズルワーン・ダルゴー・クワザータ）」とともにあったのではない．そのような連続的「時間」はBig Bangの生起とともに生じた．アフラ・マズダは，Big Bang以前の，つまり生じては滅する連続的時間以前の，生ぜずも滅っせずもしない不生不滅の「無限の時（ズルワーン・アカラナ）」(永遠の今)とともにあったのである．主神アフラ・マズダとは，宇宙創造に先立つ「無限の時（ズルワーン・アカラナ）」そのものを言うのだ．このような考え方は「ズルワニズム」と呼ばれている．

では，なぜBig Bangは生じたのか，その原因はズルワニズムの立場ではどう説明されるか．

宇宙創造以前には「無限の時（ズルワーン・アカラナ）」のみが，つまりはアフラ・マズダのみがあった．それのみがあり，それしかなかった．だからそれはOnly Oneであった．そのOneはすべてを知る智慧（マズダ）であった．しかしそれは，自分自身を未だ知るのみで，自身の智慧（マズダ）を経験したことはなかった．たとえば善とは何か，愛とは何か，美とは何かを知ってはいたが，それらを経験したことはなかった．そこでアフラ・マズダは，自らの全智（マズダ）を経験したいと思った．このときBig Bangが生じたのだと，この神学は言う．つまり宇宙の顕現は，自体非顕現の「智慧ある主（マズダ　アフラ）」が自己を経験しようと意欲したことを原因としていたのだ．アフラマズダとしての「無限の時（ズルワーン・アカラナ）」が自己を経験しようとして「長い自立的な時間（ズルワーン・ダルゴー・クワザータ）」を生み，これとともにBig Bangが生起した．

【アフラ・マズダの自己経験】

ではアフラ・マズダはどのように自己を経験したのか．

Only OneはOnly Oneのままでは，実は自己を経験することはできない．もし仮に目だけがありそれ以外何もなかったとしたら，目は何も見ることはできないだろう．指は指には触れない．相撲は一人では取れない．女は女によっては女であることを経験できない．

ではOneが己を経験するためにはどうするか．

Oneは己をTwoへと分解せざるを得ないのだ．経験するものは経験するものでありつつ，同時に己を経験されるものへと分解しない限り，真に己を経験するということはできない．この自己分解がアフラ・マズダの自己経験，つまりBig Bangだった．

たとえば自分に力があることを知っており，この力を経験したい，顕現させてみたいと思ったら，何かを引いてみればよい．ハンマー投げの選手がハンマーをブンブンと回せば，ハンマーは選手から遠ざかって飛んでいこうとするだろう．ハンマーの斥力は，選手自身の力から生じている．選手は自分の一つの力をハンマーを引く引力とハンマーが遠ざかる斥力に二極分解しているのだ．手を離さずにハンマーを回し続ける限り，彼はかつてた

教養部

だ知るのみであった自分の力を顕現させ経験することができる．しかし彼はいつか手を離す．ハンマーは飛んでいってしまい，TwoはOneとなって，力の顕現は止む．そして再びまたいつか，彼はハンマーを回す．Oneなる力はTwoなる引力と斥力となり，力の顕現が生じる．そしてTwoはまたOneへ．これが生と滅，生と死ということの意味である．宇宙に生滅する顕現のすべては，OneとなるべきTwoであったのだ．

修行中のゾロアスターは30歳のとき天啓を受け，アフラ・マズダからこの自己二極分解の様子を次のように聞いたと言われる．

「始めに二霊ありき．二霊とは心と言葉と行為においてより善なるものと，より悪なるものであった．二霊とは光りと闇なりき．光りを選ぶものは光りある存在に列せられ，闇を選ぶものは闇なる存在に列せられん．」

文頭の「始めに」とは，「宇宙創造の始めに」である．アフラ・マズダは自己を経験し始めるに当たって，丁度ハンマー投げの選手が己の力を引力と斥力に分解するように，己を光り（善霊）と闇（悪霊）に二極化したのだ．こうする以外，己が善であることの経験を可能にする術は考えられなかったからだ．

【ゾロアスター教の歴史観】

かくしてアフラ・マズダの自己経験としての宇宙の創造は始まった．「長い自立的な時間」が，すなわち走馬燈のように経巡る歴史が，こうして始まった．ゾロアスター教は，では，歴史をどのように見ているのであろうか．アフラ・マズダの自己経験としての歴史は，それぞれ三千年づつの四つの局面において展開するというのが，ここでの歴史観である．

宇宙開闢の第一四半期には，二極化した光明界と暗黒界とは虚空を隔てて完全に分離していたと，中世ペルシャ語で書かれた『ブンダヒシュン』は語っている．一方の光明界には「善霊」を中心に，「正義」を筆頭とする六柱の大天使たちが創られた．また「公正」や「忠直」等の諸神霊や，すべての善なる人に呼応する個々の守護霊が，全く影のない霊的状態で創造されていた．他方の暗黒界もまた，光明界と全く反対の構造をもって霊的に創造された．この最初の第一四半期には，プラトン流に言えば形相界が創造された．それは影を持つことのない非物質的で透明な霊的世界であった．これが三千年続いた．

第二四半期になって，これら光りと闇の霊的世界を模倣して，影を持つ非透明な二つの物質世界が創られた．

第三四半期になって，それまで画然と分離されていた二つの物質世界の混交が始まった．光りと闇は混在し，「長い自立的な時間」は混乱と闘争の場面を，三千年にわたる修羅場を迎えることとなる．

そして最後の第四四半期の始まりに，この修羅場を終焉させるべくゾロアスターが誕生したと，言われている．彼の死後その精液は霊的に保存され，処女がそれを千年ごとに受胎し，三人の息子たちがこの世の救済者（キリスト教ではこれがメシアとなる．）として生み出されてくる．そして悪霊を選び闇なる存在に列した不義者は，正義の具現者と名付けられたゾロアスターの三番目の息子との最終戦争で滅ぼされる．これをヨハネは，その『黙示録』において，神とサタンとの最終戦争として語ったのだ．

このようにゾロアスター教の歴史観では，時間の経過とともに混迷が深まっていくが，最終的にはゾロアスターの三人の息子たちによってその混迷は解消される．こういった事態は，ハンマー投げの例を持ってすれば，徐々に徐々にハンマーの回転速度が増していき，ついにはハンマーが放たれる様子に比することができよう．時間の経過とともにアフラ・マズダから遠ざかろうとする斥力（闇なる悪霊の力）は増大し，従って引力（光りなる善霊の力）も増大する．引力と斥力が最大限になること，それが，アフラ・マズダが完全に自己を経験しきることにほかならない．

上述の四局面の終焉を迎えて，彼のハンマーはついに投げられ，ひとまず彼の自己経験は完結する．そしてアフラ・マズダは再び非顕現の世界に還帰する．，そしていつかまた再び，彼はハンマーを振り回すのだ．不生不滅から生滅へ，生滅から不生不滅へ．生滅と不生不滅とは不異だ．

そのような不生不滅の絶対的善そのもの（プラトンの言う善のイデア）を言い表す言葉はあるのだろうか．

絶対的善は，悪との相対における善では決してない．そのような相対的な善の有様は，アフラ・マズダによって創られた善霊によって示されている．しかるにアフラ・マズダ自身は，善霊（引力）と悪霊（斥力）というTwo を超えてしまっている．それは善悪の彼岸にある．しかるに我々は善を定義付けようとすると，必ずこれを悪の概念と結びつけざるを得ない．善悪の彼岸は，概念

的定義付けを越えているのだ．アフラ・マズダの息づく世界は，善悪，優劣，美醜等々の二元論的世界を超えた不立文字の世界なのである．だから概念によって，ああだ，こうだと定義づけようとする態度から離脱しないかぎり，我々はアフラ・マズダを真には理解しないのである．

【誕生神話に見られる三位一体】

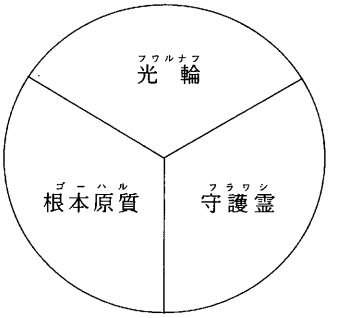
ところでゾロアスター教の歴史観では，最後の第四四半期の最初に，修羅場を治めるべくゾロアスターが誕生すると言われていた．その誕生の様子はどうだったのか．そしてこの誕生の様子から我々は，アフラ・マズダをより理解する何らかの手だてを得られるであろうか．

ゾロアスター教の神話によれば，主神アフラ・マズダは，ゾロアスターの誕生に際して，まず第一に彼の母となるドクゾーワ家の娘の胎内に，光輪を与え，そのためこの娘は生まれるときに光り輝いたと，言われている．光輪とは，自体非顕現のアフラ・マズダが，自己を経験するために顕現した姿である．すなわちそれは，顕現としてのアフラ・マズダである．

続いてアフラ・マズダは，ゾロアスターの個性となるべき守護神を，霊峰アスナワント山にあるハオマ樹に宿した．それは宇宙創造の第一四半期にあって善霊や六柱の大天使等とともに霊的世界に創り出されていたのだった．今や時熟してこれが物質世界と結びつくのだ．

さらにアフラ・マズダは，ゾロアスターの身体となる根本原質を風に乗せた．ゴーハルを含んだ風は雲となり，雲は雨となり，雨は草を育て，草は牛を育てた．根本原質は現代の我々の概念で言えば宇宙エネルギーとも言ってよい．このエネルギーの集積し凝固したものが物質であると，この神話では考えられている．．アインシュタインは，これを$E=MC^2$，すなわち$M=E/C^2$と表現したのだ．つまりは質量（物質）とはそもそもエネルギーであると，影ある物質とは影なきエネルギーの凝固であると彼は表現したのだ．

ゾロアスターの父となるべき青年ボルシャースパは，婚礼に際して守護霊を宿すハオマの樹液をとってきた．そしてドクゾーワ家の娘は，根本原質を含んだ牛の乳を搾った．すでに生まれてくる子の光輪を胎に持つ娘と青年は，樹液と乳を混ぜてハオマ酒を作り，それを飲んでから同衾したのだった．かくしてゾロアスターが誕生したと，この物語は語っている．すなわちゾロアスターは下図のような構造を持って創造された．これら三要素がゾロアスターにおいて一体となっているのだ．これがゾロアスター教における三位一体の図式である．

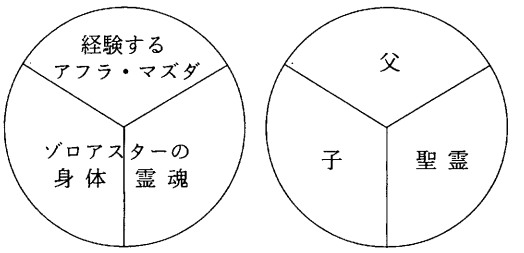


①光輪とは，自体非顕現であり，決して生じたものではなくしかもとぎれることなくあり続けるアフラ・マズダが，すなわち宇宙創造以前の超越的アフラ・マズダが，内在的に顕現した姿であった．智慧ある主は，今やゾロアスターの姿をとって自己の全智を経験するのだ．キリスト教ではこれが「父」と言われる．

②守護霊は，ゾロアスターの独自の命，魂，霊魂と言っていいだろう．ゾロアスター教においては，霊魂は身体から分離した後，この世とあの世の中間にかかる選別の橋を渡って，個別の審判を受けると言われている．三徳を実行したものは天国に入り，これに背いたものは地獄界に落とされる．このような個別性をあらわすものとしてアフラ・マズダはゾロアスターの個別の霊魂を創造したのだ．キリスト教ではこれが「聖霊」と言われる．

そして③根本原質はゾロアスターの身体となっている．これがキリスト教の言う「子」である．ゾロアスターとイエスは，下図のような同じ構造を持って存在した．

ゾロアスター　　イエス



【三位一体と三徳もしくは三密との関係】

ところで先に智慧ある主が自己を経験すべく自己を二極分解する様子を見たとき，「始めに二霊ありき．二霊とは心と言葉と行為においてより善なるものと，より悪なるものであった」と言われていた．より善なる「心と言葉と行為」は，ゾロアスター教では，善思，善語，善行の三徳と呼ばれる．敬虔なゾロアスター教徒は，これを常にはっきりと意識し続けるために三重の帯を巻いている．

「心」とは言い換えれば「意」と言ってよい．「言葉」は「口」から発せられる．「行為」は「身体」によってなされる．つまり「心と言葉と行為」は「意と口と身」と言い換えることができる．仏教ではこれを「身口意」の三密という．仏教の三密とはゾロアスター教の三徳から生じた概念にちがいない．

この三徳もしくは三密は上記の三位一体と何らか関係するのか．関係するとすればどのような関係にあるのだろうか．

①光輪は「心」もしくは「意」に該当するだろう．なぜならそれはアフラ・マズダの智慧にほかならないからだ．③の根本原質が「行為」もしくは「身」に当てはまることも容易に見て取れる．ゾロアスター教では，根本原質の集積が身体であると言われているからだ．

問題は②の守護霊である．それを私は先にゾロアスター独自の命，魂，霊魂と解した．これは言葉，口と関係するのだろうか．

根本原質はそもそも形をもたない．しかるにこれは守護霊と結びつく限りにおいて，一定の形を保つことができるのだ．すなわち守護霊は根本原質に，たとえばゾロアスターの身体という形を与えるのである．

ピタゴラスは，形をもたないものはペラスによって形を与えられるとしきりに言っている．彼の言う形を与えるものとは，ゾロアスター教の守護霊から来たにちがいない．ピタゴラスはゾロアスター教の僧に師事してこのことを知っていたのだ．そしてプラトンはピタゴラスのペラスを形相と言い換えたのだ．つまり二人ともゾロアスター教の言う守護霊の働きをそれぞれ自分流に言い換えたにすぎない．

では守護霊は根本原質にどのようにして形を与えるのか．

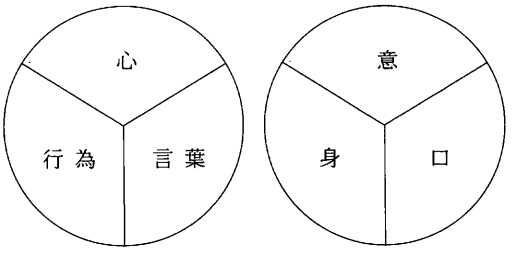
守護霊は根本原質にいわば光を照射し，この光の波動を受けて根本原質は振動を開始すると考えてみたらどうだろう．

守護霊は根本原質を照射し，照射された根本原質はまず音の波動，宇宙の根元的な振動音を生み出す．この振動音とともに宇宙の創造は始まるのだ．この音がサンスクリット語では聖音オーム，チベット語ではフームと発音される．我々日本人が阿吽と発音するのも同じことだ．「阿」は字音の初め，「吽」は字音の終わり，つまり阿吽は万物の始めと終わりを意味する音である．ヘブライ語では，宇宙初発の音を「まことに，確かに」を意味する音として，アーメンと発音する．後にキリスト教徒はこれを「かくあれ」と言う意味に解して，賛美歌の終わりに唱えている．オーム，フーム，アーメン，そして阿吽，みな宇宙の創造を表している．そしてヨハネは「初めに言葉ありき．言葉は神とともにありき．言葉は神なりき．」（『ヨハネの福音書』第１章　１～２）と言った．彼の言う「初めの言葉」も，守護霊からの光に照射された根本原質が発する宇宙の創造開始の音を指していたのだ．

根本原質は守護霊からの光波によって振動し，音すなわち言葉となりさらに，徐々に素粒子となり原子となり分子となる．そしてついに一定の形，つまりここではゾロアスターの身体という形をとるようになるのだ．そして創造の第二四半期に，影なく重さなき宇宙エネルギーは，影を持ち重さを持った質量となるのだ．

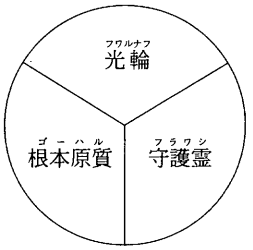
守護霊は根本原質に独自の形を与える光りの波動である．それはまず言葉となる．言葉は口から発せられる．こうして三位一体で言われていた守護霊が，三徳や三密で言われている言葉や口と関係することは明らかだろう．とすると前述の図式は，次のようにも書き換えることができる．

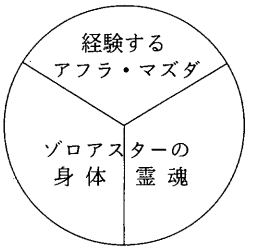
ゾロアスター教の三徳　　仏教の三密

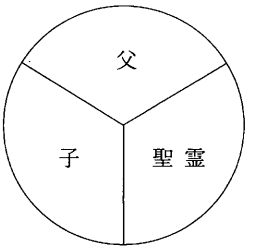


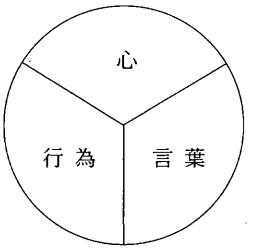
三位一体を示すこれまでの五つの図式をまとめておけば次のようになろう．

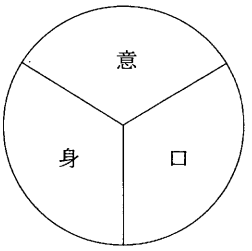
光輪（フワルナフ）	経験するアフラ・アズダ	父	心	意
守護霊（フラワシ）	ゾロアスターの霊魂	子	言葉	口
根本原質（ゴーハル）	ゾロアスターの身体	聖霊	行為	身











【汝自身を知れ】

ところでこれらの構造は単にゾロアスターやイエスの場合にのみ存在するのであろうか．

なるほどこの三位一体構造はゾロアスターの誕生神話において語れているのだから，それはただゾロアスターという特殊においてのみあり得るように見える．すなわちキリスト教が三位一体をイエスにおいてのみ認めるように，ゾロアスター教においてもこの構造は，特殊ゾロアスターの場合にのみ認められるように見える．

しかし，ゾロアスター教においては，先に見たとおり，宇宙の顕現はすべからくアフラ・マズダの自己経験だったのではないか．ということはアフラ・マズダは，宇宙での出来事すべてにおいて自己を経験していることになる．とすれば現実的顕現のすべては，三位一体構造を持っていなければならないことになる．すなわち山川草木ことごとくこの構造を有するのでなければならない．山川草木悉有光輪（フワルナフ），山川草木悉有仏性である．野に咲く花の一木一草が，空ゆく雲の一切れ一切れが，アフラ・マズダの顕現である．言うなれば，それらはすべて，アフラ・マズダという一つの花の花びらである．世界は一つの花なのだ．そうでなければ宇宙の顕現のすべてにおいて，アフラ・マズダが自己を経験することは不可能になってしまうだろう．

かってソクラテスは，その死に際して弟子たちに「汝自身を知れ」と語り残した．彼が若者たちに分からせようとした「汝自身」とは，この三位一体の構造だったのだ．彼が「善とは何か」と若者たちに問いかけていたのも，アフラ・マズダの顕現（two）と非顕現（one）を理解しろと言っていたのだ．我々においてアフラ・マズダが自己を経験しているということ，つまりは我々はアフラ・マズダなのだということ，我々は本来神であり仏なのだということ，このことをソクラテスは若ものたちに分からせようとしていたのだ．

汝自身を知れ．ただしそれは概念的定義によっては知られない．真の自己は経験することによってのみ知られる．「世界一花」の深い意味を経験せよ．

真の自己を経験するためには，ある対象に夢中になって我を忘れてしまうのをやめてみよう．夢中になるとは，真に自己を経験することではないのだ．夢中になるとは対象に気を奪われてしまうことなのだ．気を奪われてしまっては，自分に生じていることにはっきりくっきりすっきりと気づくことは不可能だ．夢中になっている我は，覚醒（フワルナフ）している我，真に経験（フワルナフ）する我ではない．

たとえば呼吸を真に経験できるように，ゆっくり息をしてみよう．歩行を経験できるように，ゆっくり歩きながら歩いていることに気づこう．

ある人への怒りが起こってきたら，その人のことだけ考えて，つまりその人に夢中になってその人に気を執られてしまうのではなく，自分の内部で怒りが生じている

ことに気づく練習ををしてみよう．気づくという形で怒りを経験しよう．すると氷が日に照らされて溶けてゆくように，いつかゆっくりと怒りが消えていくことも経験できるだろう．

ある対象とともにあるときに喜びが起こったら，怒りの場合と同じように，対象に執着して気が対象の方にさまよい出て結局気が散ってしまうことのないように，意(フワルナフ)に気を注ごう．そして自分(しんくい)の内部で喜びが起こっていることに気づいてみよう．

こうしていつの日か，喜びも怒りも心(フワルナフ)が創り出した戯(シュピール)れであることが理解できるようになるだろう．我々に今必要なのは，この日を迎えるための練習である．望めばきっとその日は来るのだ．望みさえすればきっとやり方は分かるのだ．様々な練習の仕方を，ヒンドゥ教は教えてくれるだろう．顕教も密教も教えてくれるだろう．そして何よりもチベット仏教に伝承されてきたゾクチェンの教えが，我々を導いてくれるだろう．本論はこの導きを受け入れるための準備なのであった．

Auszug

In der Lehre von Zarathustra gab es bevor dem groβen Ausbruch nur Ahura Mazda. Dann wuβte Ahura Mazda, der Herr Weisheit, sich selbst aber konnte die Erfahrung von seiner Wesheit nicht haben. So wollte es sich selbst erfahren, dann ereignete sich der groβe Ausbruch. Es teilte sich in Zwei ab, guten Geist und bösen Geist. Die lange Geschite von dem Uinversum ereignete sich.

Im letzten Qualtal von der Geschite war Zarathustra geboren. Ahura Mazda gab ihm den Ring der Licht (Huwarunahu=Ahura Mazda selbst) und den Schutzgott von Zarathustra (Huwrawashi=seinen eignen Geist) und seinen Körper (Goharu=kosmische Energie).

Der lichtende Ring, der Schtzgott und die kosmische Energie, das sind die drei Eremente von der Konstrukution Zarathustras. Wir nennen sie die Trinitaet von dem Zarathustrarismus.

In der Lehre von Zarathustra sind alle Geschehen die Erfahrung von Ahura Mazda. So haben alle Seiende solch eine Konstrukution, die Trinität. Wie haben natürlich die Trinität Konsutrukution, nämlich, unsere Erfarung ist die Erfahrung Ahura Mazdas.